

# 仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

今回の仏女新聞は毎日放送の「ちちんぷいぷい」さんとのコラボ号です。「ちちんぷいぷい」でおなじみの「ヤマヒロさん」こと山本浩之アナウンサーと一緒に、修二会花会式初日の薬師寺と、春の観光でにぎわう興福寺を取材させていただきました。ヤマヒロさんには仏女新聞の紙面に使う写真を撮っていただいています。

薬師寺さん、興福寺さん、ご参拝の方にはいろいろとご配慮をいただきました。ありがとうございます。

ヤマヒロさんに行く！

- 薬師寺
- 興福寺



画：飯島可琳

## 薬師寺

薬師寺では三月二十五日から三十一日まで修二会花会式が営まれる。ちなみに修二会とは、旧暦二月に、世の中の平安やゆかりの人々の幸福などを祈願して行う法要のことです。修二会とも言われる。奈良市にある東大寺二月堂修二会が有名だが、新薬師寺の修二会、桜井市にある

長谷寺の修二会（だだおし）などもある。

薬師寺修二会花会式は、その名前から想像できるように、期間中の堂内に花が供えられる。そうするとただでさえ美しい本尊の美しさがさらに際立つて見える。昨年、奈良国立博物館で見た月光菩薩立像と花会式の堂内で拝む月光菩薩立像とは印象がまるで違う。金堂では光背や朱の柱、そして供えられた花の色が像の肌に映り込むのだろう。

ヤマヒロさんも放射線状に組み合わせた数本の枝に花が直角に刺してあるのを見て感心していた。供えられているのは造花なので、本物の花ではできない飾り方が可能だ。たくさんの方が薬師三尊と同じように正面を向いているのが、微笑ましく見える。



撮影：山本浩之

お花を意識してみました



花会式は、平安時代に堀河天皇が皇后の病気を癒すために、平癒を薬師三尊に祈り、翌年病気が治った皇后が十種類の造花をつくらせてお供えするようになったのがはじまりとされる。花会式は病気を治してくれた薬師三尊への感謝の気持ちからはじまったものだろうが、今はさらに多くの人の薬師三尊への感謝の思いが重なって、花会式はどんどん深みのあるものになっているのではないか。私にはそう思える。

## 興福寺

興福寺は仏女新聞で幾度も書かせていただいているし、私自身、お参りに行くことが多いお寺だが、いつ行っても新しい発見がある。



興福寺教学部よりお借りしました

運慶作の仏頭は桂材（カツラ材）の寄木造りだ。私が運慶作の仏頭がカツラ材の寄木造りだと説明すると、ヤマヒロさんは寄木造りだとなにかいいことがあるのですかと興味を示してくれた。

少し話はそれるが、ヤマヒロさんにはカツラをつけていた過去がある。私はネットで調べてそのことを知っていた。「桂材の寄木造り」の話題を「ヤマヒロさんのカツラ」の方向に動かしたら面白いとアドバイスされていたのに、ヤマヒロさんはあくまで真面目で、いい感じに話が進んでしまいそうになった。強引に話を進めようとする、ヤマヒロさんはちょっと戸惑ったようだ。「カツラ？ 髪の毛を寄せる？ せっかくなにかええこと言うたのに……」。しかし、しばらくするとヤマヒロさんは「カツラつながりで親近感わいてきたわ」と笑顔を見せてくれた。どのような形であっても、仏像に親近感を持つことは大切だと思う。仏と人間は住む世界が違う。様々な説があるが、私たちがいる人間界（六道の一つ）は悲しみや怒りなど悪い感情が

存在する。仏達がいる世界にはそのような感情はない。こんなに境遇が違うのにどうして親近感を覚えるのだろうか。ヤマヒロさんがカツラつながりで仏像に親しみを覚えたのも、人間を見守り助けてくれる仏を彫刻にしたからこそ起こったことだと思う。私たちが仏像に親近感を覚えるのは、仏がいつも私たちのそばに寄り添うようなところにいるからなのかもしれない。仏像はいつもいろいろなことを感じさせたり考えさせたりしてくれる。



撮影：山本浩之

今日は東金堂がメインだから五重塔は控えめに撮ろう



## ちなみに情報

「桂」は比較的やわらかい木だ。火災で焼けた興福寺を復興した時に運慶作の仏頭がつくられた。檜と比べてやわらかくて建物に不向きだったから使ったのか、短期間で仏像を復興するためにやわらかく彫りやすい木を選んだのか、それは想像するしかない。

※紙面の写真は撮影・使用許可をいただいています。取材にご協力くださりありがとうございます。